

「マルクス主義者」としてのカレツキ*

山 本 英 司

目 次

- I はじめに
- II 学説史的検討
- III 「マルクス主義者」としてのカレツキの生涯
- IV まとめにかえて

I はじめに

カレツキは、「有効需要の原理」をケインズと独立にまたは先行して発見した者として知られ、また当該命題の妥当性をも含めてケインズとの比較研究も数多く行われている⁽¹⁾。一方、カレツキの有力な研究者であるソーヤーがその総合的研究書である『ミハウ・カレツキの経済学』(Sawyer (1985))において、「私はまた、第1章において、カレツキを広い意味でのリカード=マルクスの伝統⁽²⁾の中に位置付けるように努めている」[Sawyer (1985), p. vii; 邦訳, xxx-xxxii 頁]としているにもかかわらず、カレツキのマルクスとの比較研究は極めて層が薄い。カレツキとマルクスとの関係に言及した文献は比較的⁽³⁾多いが、本格的に比較研究を主題としたものは筆者の知る限り、総合的なものとして『ミハウ・カレツキの経済学』(Sawyer (1985))第8章「カレツキとマルクス」、『カレツキと失業均衡』(Sebastiani (1994))第5章「カレツキとマルクス」⁽⁴⁾、「カレツキとマルクス」(McFarlane (1996))、および「マルクスとカレツキ」(Kerr (1997))の4つがあるのみであり、その他、再生産表式に焦点を当てたものとして「カレツ

* 本稿は、京都大学大学院経済学研究科に提出した学位請求論文『カレツキの政治経済学』(2003年9月24日京都大学博士(経済学)授与)第5章「マルクス主義者」としてのカレツキ」に加筆したものである。

- (1) 1980年代初めまでの議論の詳細なサーベイとしてはSawyer (1985)第9章および元木 (1989)を参照のこと。
- (2) ソーヤーは、「リカード=マルクスの伝統」の「重要な特徴」として、「階級間の所得分配(リカードの言葉によれば「政治経済学における主要問題」)、資本蓄積、ならびに成長および発展の強調」[Sawyer (1985), p. 12; 邦訳, 14頁] および「資本主義社会において、利潤は何らかの剰余の概念に結びつけられるという考え」[Sawyer (1985), p. 13; 邦訳, 15頁]の2つを挙げている。
- (3) そのいくつかの具体例については本稿末尾の資料を参照のこと。
- (4) この下敷となったものとしてSebastiani (1991)がある。

キの利潤理論の諸局面：そのマルクスの再生産方程式との関連」(Sardoni (1989)), 「有効需要におけるカレツキとマルクス」(Sebastiani (1989)), および「カレツキ表式論の検討」(栗田 (1994)) の3つがあるのみである。⁽⁵⁾

そこで本稿では、カレツキとマルクスの比較研究の言わば序論として、「マルクス主義者」ないし「マルクス経済学者」としてカレツキはどのように位置付けられうるかを、カレツキの理論および伝記の両面において検討を行うものである。なお、ここで「マルクス主義者」などと括弧を用いるのは、真のマルクス主義ないしマルクス経済学とは何かという問いを、まさに現象学で言うところの「括弧に入れて」、すなわち、ひとまず棚に上げたまま議論を進めるためである。

II 学説史的検討

まず、カレツキを括弧付きであれ「マルクス主義者」として検討することの妥当性について若干の考察を行うこととする。

比較にあたっての方法論について、先行研究より次の命題が考慮されるべきである。「あるレベルにおいてカレツキとマルクスとの間に相違がある一方で、それらは同様のアプローチを異なる状況と時代に対して適用した結果にすぎないということはありうることであろう。資本主義経済の主要部分の性質が競争的であるか(マルクス)それとも寡占的であるか(カレツキ)といった相違、また使用される貨幣の性質(すなわち、金ないし紙幣か、それとも信用貨幣か)についての相違は、カレツキとマルクスとのアプローチの間の根本的な相違というよりも、資本主義経済の変化により多く起因するものであると見なすことも可能であろう」[Sawyer (1985), p. 145; 邦訳, 171頁, 傍点の原文はイタリック]。⁽⁶⁾「我々が先に指摘したように、カレツキの文体は簡潔であって、既に周知であるとか独創的ではないと彼が感じた考えは、ことさら繰り返されることはないであろう。したがってマルクスの著作のうちでカレツキが受け入れ

(5) この他、めぼしいものとして、カレツキとルクセンブルクとの比較を行う「カレツキ、ルクセンブルク、および帝国主義」(Darity (1979-80)), マルクスとケインズとシュンペーターの三者の比較をカレツキによって総括する「マルクス、ケインズ、およびシュンペーターの統合：ミハウ・カレツキの貢献への特別の強調と共に」(Mott (1986)), マルクスとケインズとカレツキの三者を取り扱う詩的形式を取った楽しい作品として「マルクスとケインズとカレツキ」(Feiner and Roberts (1986)), マルクスとケインズとカレツキの三者の比較を行う「マルクス、ケインズ、およびカレツキにおける蓄積、金融、および有効需要」(Shaikh (1989))などを挙げるができる。

(6) 「彼の文体はしばしば簡明かつ簡潔に表現されており、自分の見解を長々と述べたりせず、また一般に、強調のためにそれらを繰り返したりはしなかった。[……略……] さらに経済学分野における多くの著書とは対照的に、カレツキは、自分の述べていることの正当化のためであれ批判の対象としてであれ、他人の業績に言及することはほとんどなかった。一般的に、カレツキは、すぐに問題の核心をついたり、中心的な論点の明確な分析を与えるような仮説を立てたりすることに関心があった」[Sawyer (1985), p. 8; 邦訳, 9頁]。

た部分は、彼自身の著作においては繰り返されていないであろう。よって、マルクスの鍵となる考えのいくつかがカレツキの著作に欠如していることを、彼がそれらの考えを否定したことの根拠と見なすことはできないのである」[Sawyer (1985), p. 149; 邦訳, 176頁]。

実際、英語版カレツキ全集を見るかぎりでは、マルクス主義もしくはマルクス経済学における概念またはマルクス学派に属する人物を明示的にタイトルに有している文献（社会主義計画経済に関するものを除く）は、「計量経済学モデルと史的唯物論」(Kalecki (1964)), 「ツガンバラノフスキーとローザ・ルクセンブルクにおける有効需要の問題」(Kalecki (1967)), 「マルクスの再生産方程式と現代経済学」(Kalecki (1968b)), および「階級闘争と国民所得の分配」(Kalecki (1971a)) の4つのみであり、これ以外に索引によってマルクスを引用していることが確認される文献は、「東における戦争」(Kalecki (1932)), 『経済変動理論論文集』(Kalecki (1939a)), 「私的投資の刺激による完全雇用？」(Kalecki (1945)), 「第2次世界大戦後の景気循環に対する軍備のインパクト」(Kalecki (1955)), および「エドヴァルト・リピンスキの経済学」(Kalecki, Kowalik and Secomski (1969)) の5つのみである。これらに加えて、筆者の気付いた限りでは、索引には見当たらないがマルクスの再生産表式が明示的に利用されている文献として『経済動学理論』(Kalecki (1954a)) および「経済開発の金融問題」(Kalecki (1954b)) の2つ、ならびに暗黙のうちに利用されている文献として「3つのシステム」(Kalecki (1934)) および『貨幣と実質賃金』(Kalecki (1939b)) の2つが指摘でき、また、史的唯物論に明示的に言及している文献として「戦前の時期と比較してのアメリカ合衆国における経済状況」(Kalecki (1956)) が指摘できる。

次の命題も同様に重要である。「マルクス主義体系をマルクスが実際に言ったことを純粹に基礎にして評価するのは間違いであろう。マルクスの現代思想に対する影響をマルクス主義者であると公言する人々のみを基礎として評価することも同様に不適切であろう。[……略……] ことによるとマルクスの教義の最も豊かな果実はマルクス主義者のイデオロギーと何ら明示的な結び付きを持たない学者の著作に見出されるであろう」[Sebastiani (1994), p. 107]。

さて、何が真のマルクスであるかについて結論を下すことは本稿の範囲を超えるのであるが、とりあえずの定義として、言わば方法論的比較軸として、周知のエンゲルスの命題を採用することとしよう。エンゲルスは『空想から科学へ』(Engels (1880)) において、「これら二つの偉大な発見、すなわち唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、マルクスのおかげでわれわれにあたえられたものである。これらの発見によって社会主義は科学になった」[Engels (1880); 邦訳, 206頁, 傍点の原文はイタリック] とマルクス主義を要約した。前者の唯物史観ないし史的唯物論については、おそらく当時の「正統派」マルクス主義の見解に挑戦するものと思われるものの、カレツキは「計量経済学モデルと史的唯物論」(Kalecki (1964)) を著しており、自らを計量経済学と対比させての史的唯物論の立場に位置付けてい⁽⁷⁾る。後者の剰余価値論ないし労働価値説については、「労働価値と搾取の概念 (マルクスの意

味における)はカレッツキの著作においては登場せず、生産価格や一般的利潤率といった観念に注意が払われることもなかった」[Sebastiani (1994), p. 108]とセバスティアニーニが指摘する⁽⁸⁾とおりでである。よって、エンゲルスの基準に照らすならば、カレッツキは史的唯物論についてはマルクス主義者だが労働価値説については疑わしいということになる。

カレッツキをマルクス主義の伝統に位置付ける見解のいくつかは末尾の資料において紹介するとおりで、一方、カレッツキを明示的にマルクス主義ではないと位置付ける見解も存在する。

その名も「講座 近代経済学批判」の第3巻『資本主義と社会主義』の中の「現代の人と学説

Ⅲ」において、カレッツキはハロッド、レオンチェフ、およびモルゲンシュテルンとともに批判の対象とされている。「カレッツキ」の項の担当者である柴山は、カレッツキの理論について、「マルクス経済学への接近の意図をよみとることができる」[柴山 (1957), 280頁]とした上で、⁽¹⁰⁾

(7) 山本 (2001) を参照のこと。

(8) 野口は、「カレッツキはマルクスの搾取率にはまったく言及していないが、相対的分け前の決定機構についてのカレッツキの構想はマルクスの「搾取率」概念にヒントを得たものではないかと推測される」[野口 (1987), 21頁]としてKalecki (1943), p. 30, note 1 [CWMK, II, p. 137, n. 12], に言及し、「そこでのマルクスの利潤率低下法則への言及は、明らかに、「独占度」(粗利益比率)と「搾取率」の暗黙の同一性を前提にしている」[野口 (1987), 21頁]としている。しかしながら、ここでの「粗利益比率 (percentage gross margin)」は利潤と共通費の合計の売上高に対する比率であるので、剰余価値(「転形」後は利潤)の可変資本(同様に賃金)に対する比率である搾取率とは明らかに異なる。ただし、カレッツキにおける原材料費対賃金費用比率がマルクスにおける資本の有機的構成と同一方向に動くと仮定すると、粗利益比率は搾取率と同一方向に動くとは言える。なお、上記の『経済動学研究』(Kalecki (1943))におけるカレッツキによるマルクスへの言及は、英語版カレッツキ全集第2巻の索引には反映されていない。

(9) とは言え、マルクス自身、現実経済においては『資本論』第1巻で示されたような「価値通りの交換」は行われず、『資本論』第3巻で示されたような均等利潤率の下での生産価格を「重心の中心」とした市場価格で取引がなされているとしているのであって、カレッツキにおける「独占度」による寡占価格論もまた、生産価格と同様、労働価値説と「両立」すると位置付ける理論的可能性も無くはないであろう。しかしながら、ブルスの指摘するところによると、「彼は、例えば、マルクスの価値論に強い嫌悪感を覚え、それを形而上学とみなして(私の間違いでなければ)決して論じようとはしなかった」[Brus (1977), p. 59; 邦訳, 136頁]。実際、仮にカレッツキの価格論が労働価値説と両立すると位置付けられうるとしても、それは共産党に対して面目が立つ以上の理論に対する創造的な意義を有するとはにわかに考えがたい。しかしながら、カレッツキの著作全体に横溢する階級分析の視点、とりわけ、「企業家資本の利用可能性によって企業の規模が制限されるということは、まさに資本主義システムの核心となっている。多くの経済学者は、少なくともその抽象理論においては、企業家としての才能に恵まれた人であれば誰でも事業を起こすのに必要な資本を獲得することが出来るというビジネス・デモクラシーの状態を仮定している。このような「純粋な」企業家の活動の描写は、控えめに言って、非現実的である。企業家になるための最も重要な前提条件は、資本の所有者であることなのである」[Kalecki (1954a), pp. 94-95; CWMK, II, p. 280; 邦訳, 109頁, 傍点の原文はイタリック]とのビジネス・デモクラシー批判は、能力ではなく所有に基づく所得の存在に批判的に言及している以上、カレッツキが何らかの意味での搾取概念を有していたことを十分にうかがわせる。

(10) 柴山は次のようにも指摘している。「かれの祖国ポーランドは、人民民主主義国として社会主

しからは、カレツキー理論の基本的性格いかん。近代経済学より出発して、その限界を内在的に克服し、マルクス経済学への脱皮を完了したのであろうか。それとも、近代経済学の根幹へのマルクス経済学の部分的理論の枝葉的接木にすぎず、しょせん資本主義経済の基本的・内在的矛盾に目を蔽い、擬制的矛盾に注意を集中せしめることによって、弁護論的役割を演ずる俗流経済学の範疇を脱しえないものなのであろうか。これは興味ある問題である。この小論では、かかる点に焦点を合せつつ、カレツキー理論の紹介ならびに批判を展開したいと思う。 [柴山 (1957), 280頁]

として、もっぱら『経済動学理論』(Kalecki (1954a))を対象に検討を進めていく。その結論は次の通りである。

[……略……] 近代経済学的視角に制約されて、かれの理論も資本主義経済の運動法則を客観的に正しく把握しえなかった。したがって資本主義の矛盾を指摘しえなかった。しかるにかれの置かれた政治的環境ないし政治的センスは資本主義の矛盾に盲目たることを許さなかった。かくて近代経済学的ツールによる資本主義経済批判の展開となったしだいであるが、これはしょせん、矛盾なきところに矛盾を見出すことによって、本来の基本的矛盾より目をそらし、これを隠蔽することによって、客観的には資本主義経済を擁護するという政治的役割を演じざるをえなかったのである。 [柴山 (1957), 309-310頁]

そのように結論を下した根拠を柴山は以下のように要約している。

要するにカレツキーも資本主義経済の発展過程を資本蓄積過程すなわち資本関係の拡大再生産過程として把握するという唯一の正しい分析視角を見失い、近代経済学の伝統にしたがって、資本主義経済の発展過程を国民所得ないし産出高の増大過程に矮小化するという方法論的誤謬に陥った。そのため、利潤(剰余価値)の源泉を生産過程に見出しえずして、流通過程にこれを求めるとともに、資本主義経済の矛盾の正しい所在をも見失い、矛盾の根因を革新のスロー・ダウンに求める結果にたちいたっている。むしろ逆に革新のス

義圏に属する。しかも、かれは同国より派遣されたる国連派遣研究員であった。したがって政治的には資本主義に対して批判的たらざるをえない事情もあるであろう。しかしかれの経済学的遍歴の舞台は西欧資本主義国に限られ、しかもブルジョア経済学の栄養を摂取しつつかれの経済理論は形成された。ここにかれの経済理論の特異性の重要な源泉が見出されるであろう」[柴山 (1957), 309-310頁]。これが断片的な事実に基づく全くの憶測であることは言うまでもない。実際、柴山はどのような資料に基づいてか、1899年生まれのカレツキを1910年生まれとしている。しかしながら、上記の憶測および以下に紹介する柴山の言葉は、かつての日本におけるマルクス主義を自称する陣営のある種の典型的な思考パターンの記録として参考になるであろう。

ロー・ダウンをこそ資本主義の内在的矛盾の激化によって説明すべきときである。

[柴山 (1957), 307-308頁]

カレツキの理論が「ケインズ革命」の同時発見（ないしは先行しての発見）と称されるゆえんであるところの投資（および資本家消費）による利潤の決定（そして分配機構を通じての国民所得の決定）に対して、柴山は、剰余価値（利潤）がまず決定され、しかる後にその中から蓄積（投資）にふりむけられる部分が決定されると力説する。まず分配が先決されねばならないとの論法は、野口が、「かなり正統的なマルクス経済学者がカレツキ派に対して示す批判的姿勢を、凝縮的に表現している」[野口 (1987), 8頁] ものとして引用している Fine and Murfin (1984) においても見られる。⁽¹¹⁾

このような問題について八木は、「マルクス経済学者の通常理解は、『資本論』第I巻蓄積論にしたがって、利潤（剰余価値）→投資（蓄積）という枠にしばられたものであるが、カレツキの意義は、それを資本家にとって決定可能な変数はどちらかという視点から逆転したところにあるのである」[八木 (1988), 245頁] とした上で、両者の調和を試みる。⁽¹²⁾ すなわち、「資本の現実的蓄積がおこなわれるためには、生産がおこなわれていなければならない」という論理を「物的生産＝供給の側」の論理と位置付け、「それに対して、カレツキが提起したのは、資本主義生産における決定の関連であり需要の論理である」[八木 (1988), 245頁] と位置付ける。そして、「マルクス経済学者の蓄積論の表象を支配している剰余価値の生産→投資（蓄積）という論理は、現実の決定過程ではなく、ヨリ基底の関連を示すものだといわねばならない」[八木 (1988), 246頁] とした上で、「カレツキの仕事は、『資本論』の立体的把握に貢献したはずなのであるが、マルクス経済学者の多くはそれをみすごしたのである」[八木 (1988), 245-246頁] と評価する。⁽¹³⁾

野口は、「学説史的位置づけの定まっていなカレツキ体系」[野口 (1987), 33頁] と表現し、「われわれは、カレツキの価格・分配理論が、賃金率あるいは利潤率を産出水準から独立

(11) 「カレツキアの伝統は分配を分析するという課題を自らに課すけれども、分配に先立って価格を構成することによってそれを行うに過ぎない。したがって、新古典派理論と同様に分配は価格の結果となる。そのような派生的な分配理論の地位は疑わしいものであり、マルクスだけでなく、古典派的伝統の中で、価格を分配から引き出してその逆をしなかったスラッファとも対照的である」[Fine and Murfin (1984), p. 148, 傍点の原文はイタリック]。

(12) なお、八木 (1988), 256-257頁、における記述から判断するに、八木はカレツキをジョーン・ロビンソンと並んで「ケインジアン」として位置付けているようである。

(13) ただし、考察の結論部分において八木は次のように記す。「以上三点、くりかえせば、不生産的性格をも含めての〈資本〉の把握、貨幣論の前進的展開、ストック視点の拡張——は、マルクス経済学がどこまで立体的になりうるかを問うものであるとあってよい。それは実現すれば、現在通念において「マルクス経済学」と呼ばれているものとは、かなり違うものになるかもしれない」[八木 (1988), 256頁]。

に先決されるものとみなす古典派的または新リカード派的な生産価格理論と異なるだけでなく、投資が利潤を決定するというカレツキ命題を継承したと言われるケムブリッジ派の長期分配理論とも異なる枠組をもっていたことを、改めて確認するに至るのである」[野口(1987), 36-37頁, 圏点は原文ママ]と結論付ける。これは、おそらく学説史上の通説と言ってよい、カレツキをポスト・ケインズ派に位置付ける見解⁽¹⁴⁾に異を唱えるものである。しかしながら、野口の指摘は、ポスト・ケインズ派内部の差異を浮き彫りにしたものであるとして意義を有するであろう。

だが、「学説史的な位置づけの定まっていなかったカレツキ体系」との命題は、確かに正鵠を得ている。このことは、ハワードとキングの共著になる上下巻から成る大著『マルクス経済学の歴史』(第1巻[邦訳上巻] Howard and King (1989), 第2巻[邦訳下巻] Howard and King (1992))におけるカレツキに対する一見すると混乱した扱いからも見て取れる。

同書においてカレツキが集中して取り上げられるのは下巻第5章「マルクスとケインズ」である。邦訳149頁には「ミハウ・カレツキの伝記」という囲み記事もある。その第2節「マルクス主義者のケインズ論——最初の反応——」においては、カレツキはジョン・ロビンソンと一緒に、モーリス・ドップをケインズと折り合わせた人物として描かれている。第3節「ケインズ学派とマルクス」においては、カレツキは、ロビンソンに対してマルクスを教えた人物として描かれている。第4節「マルクス主義者のケインズ論——第二・第三の考察——」においては、カレツキは初めて「「ポスト・ケインジアン」理論家」とのレッテルを与えられている。また、「カレツキ主義者」という用語も登場し、カレツキの理論は、マルクス理論とケインズ理論との「統合の基盤」とされている。第5節「結論」においては次のように描かれる。「マルクス主義者のあいだでは多くの人々が、マルクス主義のカレツキスラッフア版をたんに「左翼ケインズ主義」にすぎないものとみなしたために、まもなく大きな分裂が生じた。それどころか、彼らは、マルクス経済思想の方法論的特殊性や交換とは区別される生産の中核

(14) 例えば以下の記述を参照のこと。「カレツキは経験的な成果を欠いているとして批判されてきたポスト・ケインジアンたちの最も重要な守護聖人である」[Harcourt (1977), p. 93]。「マルクスからカレツキを通してポスト・ケインズ派に至る垂直線があり、ケインズからスウェーデン学派に至る[……略……]水平線がある」[Sebastiani (1994), p. 105]。「ポスト・ケインジアンの考え方への[山本注:ケインズと並ぶ]もう一つの重要な影響は、ポーランド人の経済学者ミハウ・カレツキである」[Holt and Pressman (eds.) (2001), p. 3]。また、『1936年以来のポスト・ケインズ派経済学の歴史』(King (2002))第2章「An economist from Poland」はカレツキを扱っている。

(15) ローソンは、カルドアおよびロビンソンら「ネオ・ケインジアン」と、シュタインドル、バラン、およびスウィージーら「カレツキアン」とを区別して論じようとしている[Rowthorn (1981), p. 1; 邦訳, 1頁]。また、マクファーレンは、「今日のカレツキ信奉者」の中で、ラヴォワ、アレステイス、ソーヤー、およびミンスキーをマルクス主義者でないとし、シュタインドル、ハレヴィ、およびトポロフスキをマルクス主義者であるとしている[McFarlane (1996), pp. 276-277]。また、キングは、ポスト・ケインズ派内部における反ケインズ、反スラッフア、および反カレツキの3つの潮流を指摘している[King (2002), chapter 10]。

的役割、利潤率低下の最優先的重要性を強調して、明らかに反ケインズ的な態度をとった。これら両学派間の亀裂は広がって、価値論をも巻き込んだ。というのも、「左翼ケインジアン」とカレツキ主義者は、労働価値論について生じた多くの問題に直面して、彼らの反対者よりもずっと早くに、それを放棄したからであった」[Howard and King (1992); 邦訳, 157-158頁]。

以上の、一見するといささか一貫性を欠いた叙述は、カレツキの置かれた複雑な立場をむしろ正確に描写していると言えよう。つまり、カレツキはいわゆる「マルクス経済学者」や「マルクス主義者」ではなかったが、マルクス経済学の素養があり、それをロビンソンに教えたりもし、またマルクス経済学の分析用具である再生産表式を用いてケインズの有効需要の原理を表現した。それはマルクス理論とケインズ理論の「統合の基盤」を提供するものであった。⁽¹⁶⁾だが、マルクス主義の主流派からはそれはケインズ主義の一変種に過ぎないと見なされた。こうしてカレツキは「カレツキ主義者」という固有の名で呼ばれるか、あるいはもっと広く、「ポスト・ケインジアン」あるいは「左翼ケインジアン」と呼ばれるようになった、というわけである。

ここでハワードとキングはマルクス経済学者がカレツキの再定式化を受け入れるべきであったと主張しているが、あるいはカレツキがマルクス主義の「正統派」を継承する理論的可能性もあったということであろうか。だが、難問は労働価値説であったであろう。ハワードとキングはカレツキが労働価値説を放棄しているから見なしているが、仮にそうであるとして、労働価値説抜きでマルクス経済学ないしマルクス主義というものはあり得るのであるであろうか。これはすぐれてマルクス経済学ないしマルクス主義の本質とは何かに関わる問題である。

ともあれ、ここでは問題の所在を明らかにするに留め、以下、「マルクス主義者」としてのカレツキの生涯を振り返ることとする。⁽¹⁷⁾

III 「マルクス主義者」としてのカレツキの生涯

カレツキは1899年6月22日、当時ロシアの支配下にあったポーランドのウッジ (Łódź) に⁽¹⁸⁾生まれた。カレツキは1917年にワルシャワ工科大学に入学したが、1919年6月26日に軍隊に召⁽¹⁹⁾

(16) モットは、カレツキを「我々の世紀で最も重要な「ケインズ派マルクス主義者」」[Mott (1986), p. 328] としている。

(17) カレツキの生涯については、以下、特に出典を示さないかぎり Osiatyński (1997b) の年表によった。また、ポーランドの歴史については伊東・井内・中井 (編) (1998) および家本 (1994) などを参考にした。

(18) ポーランドは1795年10月24日の第3次ポーランド分割以降、プロイセン、オーストリア、およびロシアによって分割支配され、独立国家としては消滅していた。ナポレオン戦争の結果、1807年のティルジットの和約によってワルシャワ公国が成立したが所詮は傀儡国家に過ぎなかった。ナポレオン失脚後、1815年のウィーン会議でポーランド王国、ポズナン大公国、およびクラクフ共和国が成立したが、ポーランド王国はロシア皇帝を君主に戴く同君連合であり、ポズナン大公国はプロイセン王国に編入され、クラクフ共和国は分割列強3国の共同保護下に置かれていた。

集されて学業は中断した。⁽²⁰⁾ 続いて1920年2月14日よりワルシャワ大学哲学部で数学の研究を始め、1921年2月にグダニスク工科大学に移った。⁽²¹⁾ カレツキは1923年に最初の学位を取得した後、卒業を目前にした1925年に、職を失った父を助けるため学業を中断した。この年からカレツキは経済学の独学を始めた。

オシャティンスキによると、「1920年代のカレツキを知る人々の回想によれば、グダニスク工科大学を離れてから彼は極めてラディカルな見解を保持し、政治的左翼に関係するようになった。彼は共産主義の同調者であった（ただし彼は党には参加しなかった。⁽²²⁾ なぜならば、彼が言ったところによると、彼は自らの独立性を保持したかったからであった）」[Osiatyński (1990b), p. 428]。

カレツキは1929年12月1日、リピンスキが所長を務める景気循環物価研究所に初めて定職を得てカルテルの研究に従事することとなった。リピンスキは次のように当時を振り返っている。「彼が最初の理論的な研究を執筆する前には、彼は1つか2つの経済学の著作を読んでいた。ツガン-バラノフスキーの有名な恐慌の歴史とホブソンとレーニンの独占資本主義の研究がそれである」⁽²³⁾ [Lipiński (1971), p. 24]。

ポーランドが独立国家として登場するのは第1次世界大戦後であり、大戦が終結した1918年11月11日がポーランドの独立記念日となっている。

(19) オシャティンスキは、おそらく工学部であろうとしている [Osiatyński (1997b), p. 586]。

(20) カレツキが兵役に従事していた時期は第1次世界大戦終結後であるが、当時のポーランドはピウスツキ国家主席の「ヤギェウォ理念」の下、旧ポーランドの諸民族から構成される連邦国家をめざして東方においてはソビエト軍と戦い、住民投票において帰属が決定されることとなっていた西方においては住民蜂起によって住民投票の結果を覆そうとしていた。ポーランドの国境が確定したのは1923年3月15日の国際連盟による承認によってであった。

ここでヤギェウォ（ヤゲロとも言う）とは中世ポーランドにおける王朝名であり、1386年、リトアニア大公のヤギェウォがポーランド女王のヤドヴィガと結婚してポーランド王を兼ねたことから創始され、1572年、ジグムント2世アウグストの死により断絶するまで続いた。ヤギェウォ朝は一時はハンガリー王（1440-44/1490-1526）とチェコ王（1471-1526）をも兼ね、中世ヨーロッパにおいて重要な役割を果たした。

(21) 「グダニスク工科大学において彼はE・ベルンシュタインの講義に出席した」[Osiatyński (1990b), p. 425]。

(22) ポーランド共産党は1918年にポーランド王国リトアニア社会民主党と社会党左派が合同して成立していた。ポーランド王国リトアニア社会民主党は1893年7月30日にローザ・ルクセンブルクやユリアン・マルフレフスキらによってポーランド王国社会民主党として設立され、1900年1月19-21日にポーランド王国リトアニア社会民主党と改称したものである。また、ポーランド社会党は1892年11月17-23日にパリで結成されたが（ただし同党名の採用は1893年3月）、1906年11月のウィーン大会で古参グループの革命派と若手の左派とに分裂していたのであった。なお、1938年8月16日にコミンテルンはポーランド共産党を解党したが、1942年1月5日にその後身としてポーランド労働者党が結成された。同党は1948年12月15-21日に社会党と合同してポーランド統一労働者党となった。

(23) ツガン-バラノフスキー『英国恐慌史論』（1901年）、ホブソン『帝国主義論』（1902年）、およびレーニン『帝国主義論』（1917年）の3冊のこと。

カレツキは1931年12月創刊の隔週刊誌『社会主義評論』に参加し、翌年政府によって発行を停止されるまで、ヘンリク・ブラウンというペンネームで頻繁に寄稿していた⁽²⁴⁾。

コヴァリクによると、「カレツキは、その三十代において、左翼社会主義運動と密接な関係を持っていたにもかかわらず、[……略……] 彼は何人かのマルクス主義者によって政治的観点から批判された。当時マルクス主義者の間で支配的であった、「ルクセンブルク主義」に触れるものは何であれ抑圧するという傾向がおそらくはこれらの批判の理由であった」[Kowalik (1964), p. 3]。

この時代におけるカレツキの学術的な輝かしい業績は、いわゆる「有効需要の原理」をケインズの『一般理論』(Keynes (1936)) に先立ってポーランド語においてではあるが公刊した『景気循環理論』(Kalecki (1933a))⁽²⁵⁾ であるが、これに対してポーランド共産党員は「非マルクス主義的な見解」の表明を理由に批判を行った⁽²⁶⁾。

「3つのシステム」(Kalecki (1934)) において、カレツキは暗黙のうちにはあるが、最

(24) 『社会主義評論』の性格と当時のカレツキの社会主義運動との関係については Osiatyński (1990b), pp. 427-428, を参照のこと。

なお、独立後のポーランドは小党分立状況の中で政権交替が繰り返されていたが、1929年9月14日には中道左派連合が発足して、1926年の「五月クーデタ」より実質的に独裁体制を敷いていたピウスツキに対決姿勢を示した。これに対して1929年10月にピウスツキは武装将校100人を引き連れて国会に登場し、事態を「解決」した。1930年8月にはピウスツキは自ら内閣を組織して国会を解散し、同年9月9日には中道左派議員ら数千人の反対派をブジェシチの要塞監獄に収監するいわゆるブジェシチ事件が開始された。11月の「ブジェシチ選挙」は前代未聞の干渉のもとで行われ、選挙直後にピウスツキは首相の座をスワヴェク大佐に譲り、以後、首相の座を大佐グループの間で1、2年ごとに回り持ちさせた。

「政治的緊張を高めた要因のひとつとして世界恐慌がある。その影響はポーランドにおいてとりわけ深刻であった。一九二九～三三年に国民所得が二五%も下落した。それはヨーロッパで最悪の下落率であった。恐慌の影響はまず農業にあらわれ、ついで工業におよんだ。工業生産はようやく三二～三三年に底を衝いた。失業率は三五年に四〇%に達した。労働者だけではなく知識人も失業に苦しんだ」[伊東・井内・中井(編)(1998), 262頁]。

(25) オシャティンスキは、以下の4点が同書の「マルクス主義的背景」を証明するとしている。すなわち、(i) マクロ経済分析アプローチ、(ii) マルクスの再生産方程式の利用、(iii) 資本主義社会の階級的性質の概念、(iv) 資本主義体制における根本的矛盾と不安定性のアイデア [Osiatyński (1990b), p. 440]。ただし、筆者の見限りでは、同書ではいまだ再生産表式が利用されているとは言えない。

(26) パティンキンによると、「アレクサンダー・エーリッヒは、カレツキの1933年の小冊子が、2人のポーランド共産党員、アレクサンダー・ライヒマン、[……略……] およびサミュエル・フォーゲルソンによって厳しく批判されたことを私に知らせてくれた。彼らは、技術的な誤りを持っている点、および非マルクス主義的な見解を表明しているという点についてカレツキを非難していたのであった。カレツキはライヒマンの批判に対する返答を書いたが、それは彼らの間にさらに激しい論争を引き起こした」[Patinkin (1982), p. 63]。カレツキによる反論 (Kalecki (1933b)) は、もっぱらモデルの数理的な説明に捧げられており、自身がマルクス主義的であるか否かについてのイデオロギー的な弁護論は見られない。

初にマルクスの再生産表式を利用している。最初に明示的に利用したのは、カレツキの最初の英語での単行本である『経済変動理論論文集』(Kalecki (1939a))においてである。

また、カレツキは1940年2月19日よりオックスフォード大学統計研究所で研究をしていたが、その時分に「活動的な労働党員と緊密な接触」[Osiatyński (1988), p. 2; 邦訳, 15頁]を持った。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾

1945年3月よりモンリオールにある国際労働事務局に勤務していたカレツキは、第2次世界大戦後の1946年7月、カチェロフスキ再建大臣の招きでポーランドに帰国して再建省、財務省、および中央計画事務局のアドバイザーを務める。⁽²⁹⁾この時、カレツキはポーランドへの永住帰国の可能性を考えたが、「ポーランド労働者党の指導的メンバーがカレツキに対して抱いた

(27) オックスフォード時代のカレツキについては Worswick (1977) を参照のこと。

(28) 1942年の秋、労働党員を含む「社会主義解明グループ」の招きでカレツキは「民主的計画化の最小限の本質的要素」と題する講演を行った。その内容は「社会主義解明グループ」の機関誌に Kalecki (1942) として掲載されたが、カレツキ全集の編者であるオシャティスキはポーランド語版においては本編に収録したものの、英語版においては著者性に疑問を呈して付録に回している。

(29) ちなみに、1939年9月1日のドイツ軍のポーランド侵攻によって開始された第2次世界大戦によってポーランドは直ちにドイツとソビエト連邦とによって分割され、再び独立を失うこととなった。同年9月30日、亡命政府がパリに成立し、1940年6月18日にはロンドンに移ったが、1941年6月22日の独ソ戦勃発後全土がドイツに占領されたポーランドを軍事的に解放したのはソビエト連邦であった。国際政治の複雑な駆け引きの中、1945年2月4-11日のヤルタ会談と同年6月17-23日のモスクワ会談に基いての同年6月28日の挙国一致政府の成立をもってポーランドの独立は国際的に回復したと言えるであろう。

カレツキが帰国した当時のポーランドは挙国一致政府の下にあった。その後、共産主義者が権力を独占していく過程は次のようである。1947年1月19日の立憲議会選挙では労働者党は「民主諸党ブロック」を結成して臨んだ。その「狙いは他党派の政権参加を許すかわりに戦わずして自らの政権入りと主導権を確保することであった」[伊東・井内・中井(編)(1998), 364頁]。これに対して元亡命政府首相で挙国一致政府の下では2人の副首相の1人であったミコワイチク(ちなみにもう1人の副首相は労働者党書記長のゴムウカで、首相は社会党のオスプカ-モラフスキ)が率いるポーランド農民党は「自由選挙における勝利を確信していた」ため、「わずか二〇%の議席しか提供されないブロックへの参加を拒否した」[伊東・井内・中井(編)(1998), 364頁]。前年6月30日に行われた国民投票と同じく、労働党は票を操作することによって勝利を得た。1947年9月22-27日にかけてポーランドでコミンフォルム創設会議が開かれた。ミコワイチクは同年10月21日に亡命した。1948年12月に統一労働者党が結成されてからは「単一候補者名簿方式」の下、形式上は一党独裁ではないにせよ、同党は1989年の東欧革命までポーランド(1952年7月22日に採択された憲法によりポーランド人民共和国と称するようになった。なお、憲法には党の特別の役割についての規定は見られない)を支配した。

ちなみに、1948年12月の合同の直前、8月31日から9月3日にかけての労働者党中央委員会総会でゴムウカは、「右翼民族主義的偏向」との批判を受けて党書記長を解任された。ゴムウカは1951年8月2日に逮捕されたが、1953年3月5日のスターリンの死後、1954年12月13日に秘密裏に釈放され、1956年10月19-21日の統一労働者党中央委員会総会で第一書記に選出されて復権した。しかし、1970年12月13日の生活必需品の40%引き上げの発表に端を発する「十二月事件」の責任を取って同月20日の党中央委員会臨時総会で第一書記の辞任を余儀なくされた。後任にはジェレクが選出された。

疑惑」[Osiatyński (1988), p. 10; 邦訳, 25頁] のために実現しなかった。この間の事情をオシヤティンスキは次のように記している。

[……略……] これらのサークルでは、経済学者としてのカレツキの権威は尊敬されていたが、彼は、「不完全なマルクス主義者」とみなされ、このことは不可避免的に彼の考えを受け入れることをより困難なものとした。尊敬と疑惑のこの結び付きが、彼をより常任的に何らかの政府の機関ないし部門に就かせた結果におそれを抱かせることとなった。

当時カレツキに対して抱かれていた「不完全なマルクス主義」は、共産主義者であるポーランド労働者党の指導者の解釈において、経済問題に対するカレツキの不十分な「階級的方法」に基づいていたとは思われない。これらの問題においては、カレツキの態度は党のそれと極めて近いものであった。[……略……] 基本的な相違点は、経済目標の達成における「電撃作戦」戦術への彼の決然とした反対にあった。彼は決して経済を「戦線」と見なすことはなく、非現実的な「動員」計画指標などの使用に反対した。この態度は、ヒラリー・ミンツ⁽³⁰⁾や彼の側近たちのアプローチとは明確な対照をなしていた。

この当時にカレツキを知っていた人々によると、アプローチにおけるこの違いと、ポーランドにおいて政治状況が展開しつつある方向とを、カレツキは急速に認識することとなった。このことが、彼がモントリオールに戻ろうという気になった主な理由であった。彼の妻や親友や仲間の思い出によれば、1944年7月4日のケルツェのユダヤ人虐殺とその余波にとりわけ表れたユダヤ人排斥運動のうねりの増大もまた、ポーランドを離れようというカレツキの最終決定に強い影響を及ぼしたという。

[Osiatyński (1988), pp. 10-11; 邦訳, 25-26頁]

1946年12月16日にカレツキは国際労働事務局を辞職して同月30日よりニューヨークの国際連合本部に勤める⁽³²⁾。しかしながら、マッカーシズムの波の中⁽³³⁾、1955年1月1日をもっての辞表をカレツキは提出する。

ブルスによると、「自分のマルクス主義がいくらか特殊な刻印をおびていることを自覚しつつ、我々がようやく放棄し始めたばかりの神学的教条に依然として囚われていた社会主義経済学から距離を置こうという堅い意志と共に、カレツキは1954年12月、ポーランドに帰ってきた⁽³⁴⁾」[Brus (1977), p. 59; 邦訳, 136頁]。

(30) 当時、工業大臣であった。

(31) 正しくは、カレツキが一時帰国していた1946年。

(32) 国際連合勤務時代のカレツキについては Dell (1977) および Osiatyński (1997a) を参照のこと。

(33) Eshag (1977), pp. 83-84, を参照のこと。

(34) ブルスは次のようにも記している。「きわめて特徴的なことには、カレツキは既成の教条に対する彼の闘争を2つの戦線で闘ったのである。第1の戦線における闘争は、持続的成長の絶対的

カレツキは、ポーランドの社会主義計画経済の実践に関する多くの公職に就き、また多くの著作を執筆した。⁽³⁶⁾ 社会主義計画経済の理論に関する主著は『社会主義経済成長論概要』(Kalecki (1963))である。同書は1966年7月22日に第一級国家賞、1967年3月21日にはポーランド経済学会によってオスカー・ランゲ賞が与えられるなど高い評価を受けたが、オシャティンスキによると、「ポーランドの経済学者には、マルクスとレーニンからの長い引用が欠けており、社会主義システムの資本主義システムに対する優位性についての繰り返しの強調のないような言いまわしとスタイルで、社会主義的再生産の問題を議論する用意がまだなかった」[Osiatyński (1988), p. 104; 邦訳, 137-138頁]。

1964年、カレツキは『政治経済学と計量経済学 オスカー・ランゲ記念論文集』⁽³⁷⁾に「計量経

条件であるかのように言われていた、生産財を生産する「第1部門の優先的発展の法則」といういわゆる公認の法則に反対するものであった。[……略……]／第2の戦線における闘争はスターリン主義的中央計画化の忌まわしい経験に対する極端な反応に反対するものであった。中央集権的システムに対する幻滅から、解決は中央計画化のかわりに社会主義的市場メカニズムを採用することにある、という見解がきわめて人気を博していたのである。[……略……]他の多くの状況におけると同様に、彼は体制に反対するためばかりでなく、大衆受けのする誤解の時流に反対するための勇気をも持っていたのである」[Brus (1977), pp. 59-60; 邦訳, 137-139頁, 傍点の原文はイタリック]。

- (35) 例えば、帰国後早くも1955年4月1日にはカレツキは閣僚会議議長によって副首相のミンツの主席顧問に任命された。1956年の初めよりカレツキは、政府企業の金融システムについての調査のための政府委員会の仕事や計画方法の変更について経済計画国家委員会において行われた仕事に参加した。同年10月3日にはポーランド統一労働者党と政府の「職場管理における労働者の自発性の適切な発展を支援するための特別委員会」の副議長に任命された。議長は副首相のヤロシェヴィチであり、カレツキは同年夏に彼の顧問となっていた。同年秋には計画委員会の中の「1956-1960年5ヶ年計画の準備の動員のためのチーム」の責任者となった。1957年1月15日には閣僚会議議長によってカレツキは閣僚会議付属の計画委員会理事会の委員に任命された。同年1月30日には閣僚会議議長によって閣僚会議付属の経済評議会の5人の非常勤副議長の1人に任命された。ちなみに議長はランゲであった。同年9月28日には計画委員会議長によって展望計画中央委員会の議長に任命された。また同年10月には経済相互協力会議の経済委員会へのポーランド代表団の団長に任命された。

カレツキは展望計画の作成に心血を注いだ。1960年1月11日、カレツキがインドへ旅行中、3人の副首相、政府の経済諸部門の責任者たち、ポーランド統一労働者党中央委員会書記、同党中央委員会経済局の上級職員らが参加して計画委員会理事会の会議が行われた。この席上、カレツキの監督の下で作成されたポーランド展望計画の草案は鋭く批判されて退けられた。同年5月10日には閣僚会議議長はカレツキを計画委員会の理事から解任した。この頃よりカレツキは計画経済の実務からは離れてもっぱら教育と研究に活動の場を移すようになった。

- (36) 英語版カレツキ全集第3巻および第4巻を参照のこと。この分野に関するカレツキの論文集としては『社会主義経済および混合経済経済成長論文選集』(Kalecki (1972))および『経済計画論文選集』(Kalecki (1986))を参照のこと。
- (37) 1904年に生まれたランゲの60歳の誕生日を記念して出版された。なお、1965年10月2日にランゲは死去した。同書の姉妹編が、1899年に生まれたカレツキの65歳の誕生日を記念して出版された『経済の動学と計画の諸問題 ミハウ・カレツキ記念論文集』(Polish Scientific Publishers (ed.))

「経済モデルと史的唯物論」(Kalecki (1964)) を、また1967年、「ツガン-バラノフスキーとローザ・ルクセンブルクにおける有効需要の問題」(Kalecki (1967)) を著した。いずれもすぐれてマルクス主義上の概念ないし人物を直接に主題としたものである。

この間、カレツキはポーランドの社会主義計画経済の実務からは次々に外されはしたもののアカデミズムの世界においては比較的自由に活動を続けていたが、1968年3月のゴムウカ政権による「三月事件」⁽³⁸⁾の後、厳しい批判にさらされることとなった⁽³⁹⁾。

1964年の秋より計画統計中央学校においてカレツキとワスキのセミナーが隔週月曜日に開かれていたが [Osiatyński (1993), p. 249], ここでカレツキの理論は党派的利益を離れてアカデミックに検討され、カレツキの指導の下に多くの業績が生み出されていた。まさにこのセミナーを対象として、「独立した経済思想のセンターを解体し彼らの指導的な代表者たちを排除することを目的とした運動が1968年5月初めにポーランド統一労働者党中央委員会の中央党学校⁽⁴⁰⁾によって組織された会議によって始められた」 [Osiatyński (1993), p. 255]。

(1964)) である。ちなみに、ランゲの60歳の誕生日とカレツキの65歳の誕生日とが同時に祝われたパーティーでの席上、ランゲは「カレツキ教授の研究はマルクス主義の再生産理論に基づいていましたが、彼はそれをドグマとして扱うことなく彼自身の方法で発展させたのです」 [Lange (1964), p. 60] とスピーチした。

(38) その概要は次のようなものである。「一九六八年三月二日、ワルシャワ工科大学で上演されたアダム・ミツケヴィチの劇詩「父祖の祈り」が反動的な内容を含んでいるとの理由で、上演に関係した学生、教員に対する行政処分（退学、免職など）が発表された。八日以降、教員、学生の処分に抗議して、ワルシャワ大学の教員や学生が市内で連日抗議デモを行い、一日には、その規模は、労働者や市民を加えて数千人に達し、遂に警察機動隊と衝突することとなった（約三〇〇名を検挙、逮捕）。一二日～四日には、抗議行動は、全国に波及した」 [家本 (1994), 34頁]。「この過程でさまざまなスローガンが掲げられたが、中でも、チェコスロヴァキアの自由化運動（「プラハの春」）への連帯と支持を表明するものが最も多かった」 [家本 (1994), 43頁]。「三月事件」の背景についてオシャティンスキは、「1968年3月の社会的緊張と学生の抗議は、非経済的なものも含む多くの要因の結果であった。1960年代の初めから、文化と科学的研究に対する当局の方法と政策について、不平と欲求が表明されていた」 [Osiatyński (1993), p. 255] と述べている。

(39) この間の経緯については、英語版カレツキ全集第4巻に対するオシャティンスキによる編注中の「The wave of criticism in 1968-73」という項 (Osiatyński (1993), pp. 254-266) に詳しい。ポーランド語版カレツキ全集の第3巻と第4巻（いずれも社会主義を扱う）に対する注釈を大幅に再利用して1冊の単行本にしたものの英訳が『社会主義経済におけるミハウ・カレツキ』 (Osiatyński (1988)) であるが、その第5章「成長理論の基礎」の中の「一九六八—七三年の批判のうねり」という節が、若干の出入りはあるが上記の項に対応する。以下の記述は両文献に基づく。なお、Osiatyński (1988) の邦訳には誤訳が目立つ。

(40) この当時カレツキは、ユネスコが企画した5月のマルクス生誕150周年記念の会議に出席の予定で「マルクスの再生産方程式と現代経済学」(Kalecki (1968b)) を書いたが、都留の述懐によると、「私もこのシンポジウムに招かれて論文を提出したし、カレツキがくるというので、そのときの参加者は、マルクーゼを初めとして、大きな期待をもって待っていたのだが、彼は、なぜかポーランドを出国できなかった」 [都留 (1985), 117-118頁]。

会議において、イスクラは、カレツキの社会主義経済成長論をハロッド・ドーマー・モデルの引き写しであるとした上で、両者と同様、カレツキは資本の物神崇拜にとらわれていると批判した。ルドヴィチは、「我々は、以下のものを無条件に、マルクス・レーニン主義的社会主義政治経済学の最高の達成として、またマルクス主義的分析の一例としてみなすことができるであろうか。すなわち、カレツキの概念に由来し、ここ数年にわたりポーランドの経済学において最も流行した潮流となり、経済学の教科書の中にさえ浸透した社会主義経済成長理論を？」と問いをたてた上で、「私の思うところでは答えは否であろう」と自ら回答を与えた [Osiatyński (1993), p. 255-256]。

会議の参加者は、「政治経済学の特定の分野における個々の間違っただ概念を明らかにして批判的に検討し、集中した研究努力を要求する無視されてきた諸問題を指摘し、経済研究の建設的プログラムを作成する機会を提供するための」 [Osiatyński (1993), p. 256] 同様の将来の会議を組織することを提案した。この決議の文脈の中でポーランド経済学会の理事会が開かれ、カレツキと彼の同僚の多くが教育研究活動を行う計画統計中央学校での会議に引き継がれることとなった。

1968年6月17日から18日にかけて、「政治経済学とその教育の主要問題」を議題とした会議が計画統計中央学校の学長と学校党執行委員会によって組織された。会議は4つの論文の提示によって開始されたが、そのうち2つは特にカレツキの社会主義経済成長理論に向けられていた。

ソコウォフは、「政治経済学とポーランドにおけるその発展の諸問題」と題する論文において、カレツキを批判しながらも、むしろ、「ブルジョワ経済思想の進歩派において育てられた」カレツキをマルクス主義に引き入れるかわりに「その強い科学的個性の前に降伏した」として、カレツキの親密な同僚たちを批判した⁽⁴¹⁾ [Osiatyński (1993), p. 257]。

カレツキ自身に対する激しい批判はグルスキの「社会主義経済の下での経済成長理論の諸問題」と題する論文においてなされた。グルスキは、カレツキとワスキが「現代成長理論のマルクス主義的源泉の評価」をしなかったとして批判した。さらにグルスキは、カレツキの理論は「行き過ぎた形式主義、経験的検証と実際の適用のための可能性と現実性の欠如、その将来の発展の限界効用逓減、ブルジョワ経済学の影響への屈服、社会主義経済における成長の社会的要因と条件の分析の欠如、そして社会主義経済の機能の理論からの分離」であるとして批判した。さらにグルスキは、経済学における大学カリキュラムの再編成にも言及した [Osiatyński

(41) ソコウォフとは正反対の立場からではあるが、リピンスキは次のように書いている。「他の強烈な個性の持ち主と同様、カレツキには疑いなく、追従者や弟子と同様、亜流が存在した。しかし彼らに対する責任がカレツキにあるだろうか？ カール・マルクスほど亜流を無慈悲に酷評した者はいなかった。しかし彼の場合でさえ、それは無益であった。彼らが、主人と仰ぐ者によって罵られるマルクスの亜流の群れは数え切れないほどの広がりであった」 [Lipiński (1971), p. 26]。

(1993), pp. 257-258]。

これらの批判に対し、カレツキは「政治経済学とその教育の主要問題」についての討議に寄せて」(Kalecki (1968a))と題する反論を行った。その中でカレツキはソコウォフに触れて、「私はこの種のマルクス主義を熱望することはない。⁽⁴²⁾それは実のところ独占資本主義の矛盾をあいまいにする。マルクス主義の本質はこれらの矛盾を解明することにある。1933年から1968年まで私はそれらを説明する研究を行ってきた」[Kalecki (1968a); CWMK, IV, p. 259]などと述べ、その他提出された疑問に逐一反論した。またカレツキは、同時に批判の対象となった同僚であるブルストとテピフトの弁護をも行った。

しかしながら、「カレツキによって表明されたこれらの見解の長所についての議論は行われなかった。いずれにせよ、そのようなことはこの会議の目的ではなかった。しかしながら、その制度上の効果は、カレツキが自分の周りに集めた経済学者のサークルの解散という形で非常に急速に現われた⁽⁴³⁾」[Osiatyński (1988), p. 114; 邦訳, 151頁]。1968年6月26日には、カレツキが1964年にポーランドで出版した著作の増補改訂版の出版契約が破棄された。「この後、彼はあからさまに自分の著作集をポーランドで発表することを拒否した⁽⁴⁴⁾」[Osiatyński (1997b), p. 604]。

これらの出来事に抗議してカレツキは1968年10月8日付けの手紙において、同年9月30日付

(42) ヌティの次の述懐はこの言葉を受けてのものと思われる。「私は1968年5月に再びカレツキと会った。[……略……]あるセミナーにおいて彼は私に次のように語った。誰かが彼はマルクス主義者かどうかと言って挑んできたが、「もしもあなたがマルクス主義者なら」とカレツキが答えるには、「それなら私はそうではない」」[Nutti (1989), p. 319]。

なお、この会議の様子はファイウェルによって Feiweil (1975), pp. 451-452, においても触れられているが、そこではこれがカレツキの語った唯一の言葉とされている。しかしながら、Kalecki (1968a)に見られるように、カレツキは個々の論点に即して具体的に反論を行ったのであって、ファイウェルの記述は資料不足に基づく脚色であると思われる。

いずれにせよ、カレツキがそのような発言を行ったこと自体は事実であるが、この言葉は、エンゲルスが紹介するマルクスの言葉を思い出させる。「ところで、フランスにおけるいわゆる「マルクス主義」はたしかにまったく独特な産物であって、しかも、マルクスがラファエルグに、もしそれがマルクス主義であるならば、私はマルクス主義者ではない、と言ったような、独特な産物なのです」[[エンゲルスからエドゥアルト・ベルンシュタイン(在チューリヒ)へ ロンドン, 八二年一月二三日], 『マルクス=エンゲルス全集』第35巻, 336頁]。「今日では唯物論的歴史観も、歴史を研究しない口実にそれを利用しているような味方をたくさんもっています。マルクスが七〇年代末のフランスの「マルクス主義者たち」について、「私が知っているのは、ただ、私はけっしてマルクス主義者ではないということだけだ」と言ったのとそっくりです」[[エンゲルスからコンラート・シュミット(在ベルリン)へ ロンドン, 九〇年八月五日], 『マルクス=エンゲルス全集』第37巻, 379頁, 傍点の原文はイタリック]。

(43) 詳しくは Feiweil (1975), pp. 448-449, を参照のこと。

(44) 「カレツキは次のように言ったと伝えられる。「あなた方は「修正主義者」が学術出版物を独占していると言って非難した。それならあなた方自身でページを埋めてみなさい」」[Feiweil (1975), p. 451]。

けでの、すなわち定年の1年前での計画統計中央学校の辞職を要求した。辞表は受理された。

IV まとめにかえて

1970年4月17日、カレツキは脳溢血で死去した。

1968年6月以降の最後の2年間に新たに執筆された理論的著作（全てポーランド国外で、場合によってはスペイン語やイタリア語で、また場合によっては死後、発表された）は、「マルクスの再生産方程式と現代経済学」（Kalecki (1968b)）、「異なった社会システムにおける成長理論」（Kalecki (1970a)）、「階級闘争と国民所得の分配」（Kalecki (1971a)）、「クラとの共著での「ボリビア：ラテンアメリカにおける中間体制」（Kalecki and Kula (1970)）、「およびコヴァリクとの共著での「「決定的な改革」についての考察」（Kalecki and Kowalik (1971)）の5つである。これらのあからさまに政治経済学的な主題の集中に、「マルクス主義者」としてのカレツキの闘いを感じるの(45)は筆者だけであろうか。

次の2人の研究者の言葉は、「マルクス主義者」としてのカレツキという主題にほぼ共通の回答を与えている。

マルクス主義的なアプローチと多くのマルクスの経済分析ツールの巨大な意義を認めながらも、カレツキは、自分がマルクス経済学の全ての構成要素を受け入れなければならないとか、あるいは新しい経験と経済理論の進歩との見地から時代遅れとなったその部分を保持しなければならないとは、決して感じたことはなかった。彼は、例えば、マルクスの価値論に強い嫌悪感を覚え、それを形而上学とみなして（私の間違いでなければ）決して論じようとはしなかった。また彼は、その時代の党指導者たちの「権威ある」解釈にしばられて、彼らの政策が転変するごとにその擬似理論的な正当化を見出すことにのみ関心があり、同時に他方では、社会主義を矛盾についてのマルクス主義的な弁証法による吟味の対象とすることを拒否するような、制度化されたマルクス主義者でもなかった。カレツキにとって、社会主義は、いかに資本主義とは異なっていようと、葛藤の無いユートピアでは決してなかったのである。 [Brus (1977), p. 59; 邦訳, 135-136頁]

カレツキは、マルクスの影響を背景として自分自身の考えを発展させようとしていた人

(45) ファイウェルは、「彼の辞職に続くカレツキの残された2年間は、悲劇的に不幸なものであり、ある意味において全くの空虚であった。[……略……] 1969年春におけるケンブリッジへの旅行を除いて、彼は運命に打ち捨てられた日々の生活を送った」[Feiweil (1975), p. 453] と記すが、この描写はカレツキを取り巻く悲劇を強調するあまり、その中であっての彼の主体性を無視したものと筆者には思われる。

物であって、自分自身の考えを厳密かつ意図的にマルクスのそれに依拠させるような人物でもなく、あるいはマルクスが真に意味していたものは何か、マルクスが言おうとしたこと、言うべきであったことは何だったのかというような問題に関心を持つような人物でもなかった、と我々は考える。[……略……] [Sawyer (1985), p. 148; 邦訳, 175頁]

【資料】

カレツキとマルクスとの関係に言及した文献

「カレツキ教授の研究はマルクス主義の再生産理論に基づいていましたが、彼はそれをドグマとして扱うことなく彼自身の方法で発展させたのです」 [Lange (1964), p. 60]。

「その基本的な諸仮定において深く反資本主義者であって、カレツキの概念は『資本論』第3巻に詳説されたマルクスのアイディアのある種の発展であり、また同時に、ローザ・ルクセンブルクが20年前に格闘した問題への解決として見なすことができるであろう」 [Kowalik (1964), p. 3]。

「再生産と蓄積についてのマルクスの表式と、有効需要についてのケインズのモデルとは、現在の理論的なモデル構築の先駆である。マルクスの精神において構築されたカレツキのモデルが、西側経済学の現在の世代には周知のものとなっているケインズ体系の本質的な要素の全てをいかに実際に前もって示していたかということは、しばしば適切に評価されていない」 [Klein (1964), p. 189]。

「カレツキはケインズに対して1つの重大な強みをもっていた——彼は、正統派経済学を学んだことがなかったのである。『一般理論』の序は次のような言葉で終わっている。「ここに述べられている思想は、こみ入った形で表現されているけれども、きわめて単純なものであり、明白なものである。困難は、新しい思想にあるのではなく、大部分のわれわれと同じように教育されてきた人々の心の隅々にまで広がっている古い思想からの脱却にある」。／カレツキはそのような教育を受けていなかった。彼の学んだ唯一の経済学はマルクスの経済学であった」 [Robinson (1964), p. 338; 邦訳, 47頁]。

「カレツキはマルクスを引き合いに出すことはなかったが、カレツキは実際にはマルクスの方法を用いたのである。[……略……] 私にとって、彼の論文は経済現象のマルクス主義的分析の古典的例であった」 [Lipiński (1971), p. 26]。

「カレツキの分析的システムはマルクスの再生産表式に基づいていた。彼はマルクス主義者に「剰余価値の実現問題」——すなわち有効需要の決定——についての首尾一貫した解決を与えた。それは、かつて誰もマルクスの著作から引き出すことに成功しなかったものであった」 [Robinson (1971), p. 2]。

「カレツキの資本主義経済分析の基本的方法は、かれの諸論文から明らかなように、『資本論』におけるマルクスの見解のかれ独自の展開とみることができる」 [玉井 (1973), 88頁]。

「カレツキがその研究生活のはじめのころから摂取し影響をうけたマルクスの方法は、第二次大戦後、かれの研究の中心課題の一つとなった社会主義の成長理論ならびに計画化理論、および低開発混合経済開発理論の定式化においても、その重要な方法論的基礎として一貫して生かされている」〔玉井（1973）、92頁〕。

「マルクス主義者は健全財政と金本位制のスローガンをもってケインズに応酬していた。そのなかでカレツキだけが『資本論』第Ⅱ巻の拡大再生産表式の要点を理解していて、その基礎のうえに「ケインズ的」理論をうち建てたのである」〔Robinson（1975）、p. x; 邦訳、3頁〕。

「経済動学の基本要素としての社会システムの役割の十分な認識には、疑いなく、最も一般的な形で、カレツキの経済学のマルクス主義的な基礎が反映している」〔Brus（1977）、p. 59; 邦訳、135頁〕。

「カレツキの理論は経済思想の古典派的・マルクス主義的伝統と密接な関係がある。重要なことには、カレツキはそのような概念的背景から出発することによってケインズの弱点のいくつかを克服することが出来たのであった」〔Sardoni（1986）、p. 438〕。

「カレツキの思想は確実にマルクス主義の伝統の下にあり、彼は、ケインズが同時期において到達しようとしていたものと極めて類似した分析結果を提出することが出来たのであった。よって本書がカレツキの理論を考慮に入れることは自然なことで、ほとんど自明と思われる。カレツキの理論はマルクスとケインズのアプローチの「統合」を提供するであろう」〔Sardoni（1987）、p. 7〕。

「ケインズとカレツキの違いは主に、ケインズはマーシャルからの離脱者であるのに対してカレツキはマルクスからの離脱者であることである」〔Kaldor（1989）、p. 8〕。

「カレツキは、〔……略……〕マルクスの方法論的指示を利用して資本主義だけでなく中央計画化経済と発展途上国経済の研究を行った」〔Osiatyński（1990a）、p. 3〕。

「本稿においてカレツキの社会主義経済学はマルクスの資本主義批判とケインズの安定化政策の限界についての彼の理解に根ざすものとして提出される」〔Toporowski（1996）、p. 169〕。

参 考 文 献

- Brus, Włodzimierz (1977) "Kalecki's Economics of Socialism", *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 57-67. (「カレツキの社会主義経済学」, W・ブルス著, 佐藤経明訳『社会主義における政治と経済』(岩波現代選書22) 岩波書店, 1978年11月, 131-154頁.)
- Darity, William A., Jr. (1979-80) "Kalecki, Luxemburg, and Imperialism", *Journal of Post Keynesian Economics*, 2 (2), Winter 1979-80, pp. 223-230.
- Dell, Sidney (1977) "Kalecki at the United Nations, 1946-54", *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 31-45.
- Engels, Friedrich (1880) 『空想から科学への社会主義の発展』『マルクス=エンゲルス全集』第19巻, 大月書店, 1968年10月, 179-225頁.
- Eshag, Éprime (1977) "Kalecki's Political Economy: A Comparison with Keynes", *Oxford Bulletin of*

- Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 79-85.
- Feiner, Susan F. and Roberts, Bruce B. (1986) "Marx and Keynes and Kalecki", *Journal of Economic Issues*, 20 (4), December 1986, pp. 1135-1136.
- Feiwel, George R. (1975) *The Intellectual Capital of Michal Kalecki: A Study in Economic Theory and Policy*, Knoxville: The University of Tennessee Press, 1975.
- Fine, Ben and Murfin, Andy (1984) *Macroeconomics and Monopoly Capitalism*, Brighton, Sussex: Wheatsheaf, 1984.
- Harcourt, G. C. (1977) Review of *The Intellectual Capital of Michal Kalecki*, by George R. Feiwel, *Economica*, 44 (173), February 1977, pp. 92-94.
- Holt, Richard P. F. and Pressman, Steven (eds.) (2001) *A New Guide to Post Keynesian Economics*, London: Routledge, 2001.
- Howard, M. C. and King, J. E. (1989) *A History of Marxian Economics*, Volume I, 1883-1929, Houndmills: Macmillan Education, 1989. (振津純雄訳『マルクス経済学の歴史(上) 1883—1929年』ナカニシヤ出版, 1997年5月.)
- (1992) *A History of Marxian Economics*, Volume II, 1929-1990, Houndmills: Macmillan Education, 1992. (振津純雄訳『マルクス経済学の歴史(下) 1929—1990年』, ナカニシヤ出版, 1998年11月.)
- 家本博一 (1994) 『ポーランド「脱社会主義」への道——体制内改革から体制転換へ——』名古屋大学出版会, 1994年2月.
- 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫(編) (1998) 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』(新版世界各国史20) 山川出版社, 1998年12月.
- Kaldor, Nicholas (1989) "Personal Recollections on Michał Kalecki", in Sebastiani (ed.) (1989), pp. 3-9.
- Kalecki, Michał (1932) under the pseudonym 'Henryk Braun', "Wojna na Wschodzie", *Przegląd Socjalistyczny*, 2 (5), 1932, pp. 1-3. Translated in English as "War in the East", in *CWMK*, VI, pp. 164-169.
- (1933a) *Próba teorii koniunktury*, Warsaw: Instytut Badania Koniunktur Gospodarczych i Cen, 1933. Translated in English as *Essay on the Business Cycle Theory*, in *CWMK*, I, pp. 65-108.
- (1933b) "Odpowiedź na „Uwagi krytyczne o jednej z matematycznych teorii koniunktury” Aleksandra Rajchmana", *Kwartalnik Statystyczny*, 10 (4), 1933, pp. 487-502. Translated in English as "Critical Remarks on one of the Mathematical Theories of the Business Cycle' by Aleksander Rajchman: A Rejoinder", in *CWMK*, I, pp. 109-119.
- (1934) "Trzy układy", *Ekonomista*, (3), 1934, pp. 54-70. Translated in English as "Three Systems", in *CWMK*, I, pp. 201-219.
- (1939a) *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, London: Allen and Unwin, 1939. Reprinted in *CWMK*, I, pp. 233-318. (増田操訳『ケインズ雇傭と賃銀理論の研究』戦争文化研究所, 1944年5月.)
- (1939b) *Place nominalne i realne*, Warsaw: Instytut Gospodarstwa Społecznego, 1939. Translated in English as "Money and Real Wages", in *CWMK*, II, pp. 21-50.
- (1942) "The Minimum Essentials for Democratic Planning", *Labour Discussion Notes*, 35, September 1942. Reprinted in *CWMK*, III, pp. 269-274.

- (1943) *Studies in Economic Dynamics*, London: Allen and Unwin, 1943. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 117-190.
- (1945) “Full Employment by Stimulating Private Investment?”, *Oxford Economic Papers*, 7, March 1945, pp. 83-92. Reprinted in *CWMK*, I, pp. 377-386.
- (1954a) *Theory of Economic Dynamics: An Essay on Cyclical and Long-Run Changes in Capitalist Economy*, London: George Allen and Unwin, February 1954. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 205-348. (宮崎義一・伊東光晴訳『経済変動の理論 資本主義経済における循環的及び長期的変動の研究』新評論, 1958年7月.)
- (1954b) “El problema del financiamiento del desarrollo económico”, *El Trimestre Económico*, 21 (4), October-December 1954, pp. 381-401. Translated in English as “The Problem of Financing Economic Development”, in *CWMK*, V, pp. 23-44.
- (1955) “Wpływ militaryzacji na cykl koniunkturalny w okresie po II wojnie światowej”, Warsaw: Institute of Social Science at the Central Committee of Polish United Workers’ Party, *Lecture Notes*, Nos. 372 and 379, 1955. Translated in English as “The Impact of Armaments on the Business Cycle after the Second World War”, in *CWMK*, II, pp. 351-373.
- (1956) “Sytuacja gospodarcza Stanów Zjednoczonych w zestawieniu z okresem przedwojennym”, *Ekonomista*, (4), 1956, pp. 3-13. Translated in English as “The Economic Situation in the USA as Compared with the Pre-War Period”, in *CWMK*, VII, pp. 278-286.
- (1963) *Zarys teorii wzrostu gospodarki socjalistycznej*, Warsaw: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1963. (竹浪祥一郎訳『社会主義経済成長論概要』日本評論社, 1965年2月.)
- (1964) “Econometric Model and Historical Materialism”, in *On Political Economy and Econometrics: Essays in Honour of Oskar Lange*, Warsaw: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1964, pp. 233-238. Reprinted in *CWMK*, VII, pp. 301-307. (森重泰訳「計量経済学モデルと史的唯物論」『経済評論』16 (10), 1968年10月, 154-159頁.)
- (1967) “Zagadnienie realizacji u Tugana-Baranowskiego i Róży Luksemburg”, *Ekonomista*, (2), 1967, pp. 241-249. Translated in English as “The Problem of Effective Demand with Tugan-Baranovsky and Rosa Luxemburg”, in *CWMK*, II, pp. 451-458. (「ツガン-バラノフスキーとローザ・ルクセンブルグにおける有効需要の問題」, Kalecki (1971b), 邦訳, 148-157頁.)
- (1968a) “Głos w dyskusji and ‘Głównymi problemami ekonomii politycznej i jej nauczania’”. Translated in English as “Contribution to the Debate on ‘The Main Problems of Political Economy and Teaching It’”, in *CWMK*, IV, pp. 259-264.
- (1968b) “The Marxian Equations of Reproduction and Modern Economics”, *Social Science Information*, 7 (6), December 1968, pp. 73-79. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 459-466.
- (1970a) “Theories of Growth in Different Social Systems”, *Scientia*, 105, May-June 1970, pp. 311-316. Reprinted in *CWMK*, IV, pp. 111-117.
- (1971a) “Class Struggle and the Distribution of National Income”, *Kyklos*, 24 (1), 1971, pp. 1-9. Reprinted as “Class Struggle and Distribution of National Income”, in *CWMK*, II, pp. 96-103. (「階級闘争と国民所得の分配」, Kalecki (1971b), 邦訳, 158-166頁.)
- (1971b) *Selected Essays on the Dynamics of the Capitalist Economy 1933-1970*, Cambridge: Cambridge University Press, 1971. (浅田統一郎・間宮陽介共訳『資本主義経済の動態理論』(ポス

- ト・ケインジアン叢書6) 日本経済評論社, 1984年12月.)
- (1972) *Selected Essays on the Economic Growth of the Socialist and the Mixed Economy*, London: Cambridge University Press, 1972.
- (1986) *Selected Essays on Economic Planning*, edited, translated and introduced by Jan Toporowski, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- (1990-1997) *Collected Works of Michał Kalecki*, 7vols., edited by Jerzy Osiatyński, Oxford: Clarendon Press, 1990-1997. (本稿では CWMK と略記。)
- Kalecki, Michał and Kowalik, Tadeusz (1971) “Osservazioni sulla ‘riforma cruciale’”, *Politica ed Economia*, 2-3, 1971, pp. 190-196. Translated in English as “Observations on the ‘Crucial Reform’”, in CWMK, II, pp. 467-476.
- Kalecki, Michał; Kowalik, Tadeusz; and Secomski, Kazimierz (1969) “Ekonomia Edwarda Lipińskiego”, *Ekonomista*, (2), 1969, pp. 329-365. Translated in English as “The Economics of Edward Lipiński”, in CWMK, VII, pp. 335-373.
- Kalecki, Michał and Kula, Marcin (1970) “Bolivia: un ‘Régimen Intermedio’ en América Latina”, *Economía y Administración*, 16, 1970, pp. 75-78. Translated in English as “Bolivia: An ‘Intermediate Regime’ in Latin America”, in CWMK, V, pp. 169-171.
- Kerr, Prue (1997) “Marx and Kalecki”, *Contributions to Political Economy*, 16, 1997, pp. 23-47.
- Keynes, John Maynard (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*, London: Macmillan, 1936. (塩野谷祐一訳『普及版 雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 1995年3月。)
- King, J. E. (2002) *A History of Post Keynesian Economics Since 1936*, Cheltenham: Edward Elgar, 2002.
- Klein, Lawrence Robert (1964) “The Role of Econometrics in Socialist Economics”, in Polish Scientific Publishers (ed.) (1964), pp. 181-191.
- Kowalik, Tadeusz (1964) “Biography of Michał Kalecki”, in Polish Scientific Publishers (ed.) (1964), pp. 1-12.
- 栗田康之 (1994) 「カレツキ表式論の検討」『秋田経済法科大学経済学部紀要』20, 1994年9月, 1-23頁。
- Lange, Oskar Ryszard (1964) “Michał Kalecki”, *Polish Perspectives*, 3 (9), September 1964, pp. 59-61.
- Lipiński, Edward (1971) “Michał Kalecki”, *Polish Perspectives*, 14 (9), September 1971, pp. 24-35.
- McFarlane, Bruce J. (1996) “Kalecki and Marx”, in Zarembka, Paul and Sinha, Ajit (eds.), *Latest Developments in Marxist Theory* (Research in Political Economy, Volume 15), Greenwich, Connecticut: JAI Press, pp. 253-279.
- 元木久 (1989) 「カレツキとケインズ革命——『一般理論』の発見——」, 橋本昭一編『近代経済学の形成と展開』(昭和堂入門選書17) 昭和堂, 1989年5月, 185-228頁。
- Mott, Tracy (1986) “Marx, Keynes, and Schumpeter: A Synthesis with Special Emphasis on the Contributions of Michał Kalecki”, in Helburn, Suzanne W. and Bramhall, David F. (eds.), *Marx, Schumpeter, and Keynes: A Centenary Celebration of Dissent*, Armonk, New York: M. E. Sharpe, 1986, pp. 327-335.
- 野口真 (1987) 「ミハウ・カレツキにおける現代資本主義分析の方法と理論 (1)」『秋田経済法科大学経済学部紀要』7, 1987年9月, 1-42頁。
- Nuti, D. M. (1989) “Michał Kalecki’s Contributions to the Theory and Practice of Socialist Planning”, in

- Sebastiani (ed.) (1989), pp. 317-358.
- Osiatyński, Jerzy (1988) *Michał Kalecki on a Socialist Economy*, London: Macmillan, 1988. (岩田裕監訳『ポーランド改革の経済理論 カレツキの社会主義モデル』大月書店, 1990年6月.)
- (1990a) “Introduction”, to *CWMK*, I, pp. 1-11.
- (1990b) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, I, pp. 421-594.
- (1993) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, IV, pp. 235-355.
- (1997a) “On Michał Kalecki’s Work for the United Nations”, in *CWMK*, VII, pp. 552-575.
- (1997b) “Main Dates and Facts in Kalecki’s Life”, in *CWMK*, VII, pp. 586-605.
- Patinkin, Don (1982) *Anticipations of the General Theory? And Other Essays on Keynes*, Chicago: The University of Chicago Press, 1982.
- Polish Scientific Publishers (ed.) (1964) *Problems of Economic Dynamics and Planning: Essays in Honour of Michał Kalecki*, Warszawa: Polish Scientific Publishers, 1964.
- Robinson, Joan Violet (1964) “Kalecki and Keynes”, in Polish Scientific Publishers (ed.) (1964), pp. 335-341. (「カレツキとケインズ」, J. ロビンソン著, 山田克巳訳『資本理論とケインズ経済学』(ポスト・ケインジアン叢書11) 日本経済評論社, 1988年11月, 43-52頁.)
- (1971) “Michał Kalecki”, *Cambridge Review*, 93 (2204), October 22, 1971, pp. 1-2, 4.
- (1975) “Foreword”, to Kregel, Jan Allen, *The Reconstruction of Political Economy: An Introduction to Post-Keynesian Economics*, London: Macmillan, 1975, pp. ix-xiii. (J. A. クリーゲル著, 川口弘監訳, 緒方俊雄・福田川洋二共訳『政治経済学の再構築 ポスト・ケインズ派経済学入門』(ポスト・ケインジアン叢書1) 日本経済評論社, 1978年2月, 1-6頁.)
- Rowthorn, Bob (1981), “Demand, Real Wages and Economic Growth”, *Thames Papers in Political Economy*, 22, Autumn 1981, pp. 1-37. (野口真訳「需要, 実質賃金, 経済成長」, ポブ・ローソン著, 横川信治・野口真・植村博恭訳『構造変化と資本主義経済の調整』学文社, 1994年6月, 1-46頁.)
- Sardoni, Claudio (1986) “Marx and Keynes on Effective Demand and Unemployment”, *History of Political Economy*, 18 (3), Fall 1986, pp. 419-441.
- (1987) *Marx and Keynes on Economic Recession: The Theory of Unemployment and Effective Demand*, Brighton: Wheatsheaf, 1987.
- (1989) “Some Aspects of Kalecki’s Theory of Profits: Its Relationship to Marx’s Schemes of Reproduction”, in Sebastiani (ed.) (1989), pp. 206-219.
- Sawyer, Malcolm Charles (1985) *The Economics of Michał Kalecki*, London: Macmillan, 1985. (緒方俊雄監訳『市場と計画の社会システム カレツキ経済学入門』(ポスト・ケインジアン叢書23) 日本経済評論社, 1994年9月.)
- Sebastiani, Mario (1989) “Kalecki and Marx on Effective Demand”, *Atlantic Economic Journal*, 17 (4), December 1989, pp. 22-28.
- (1991) “Observations on Marx’s and Kalecki’s Approaches to the Theory of Effective Demand”, in Caravale, Giovanni A. (ed.), *Marx and Modern Economic Analysis*, Volume II, *The Future of Capitalism and the History of Thought*, Aldershot: Edward Elgar, 1991, pp. 264-282.
- (1994) *Kalecki and Unemployment Equilibrium*, London: Macmillan, 1994.
- Sebastiani, Mario (ed.) (1989) *Kalecki’s Relevance Today*, London: Macmillan, 1989.
- Shaikh, Anwar (1989) “Accumulation, Finance, and Effective Demand in Marx, Keynes, and Kalecki”, in

- Semmler, Willi (ed.), *Financial Dynamics and Business Cycles: New Perspectives*, Armonk, New York: M. E. Sharpe, 1989, pp. 65-86.
- 柴山幸治 (1957) 「カレツキー」, 岸本誠二郎・都留重人監修『資本主義と社会主義』(講座近代経済学批判III), 東洋経済新報社, 1957年5月, 279-310頁.
- 玉井龍象 (1973) 「M. カレツキの学説史的位罫と「独占度」概念」『桃山学院大学経済経営論集』15 (1), 1973年6月, 82-107頁.
- Toporowski, Jan (1996) "Kalecki, Marx, and the Economics of Socialism", in King, John E. (ed.), *An Alternative Macroeconomic Theory: The Kaleckian Model and Post-Keynesian Economics*, Boston: Kluwer Academic Publishers, 1996, pp. 169-186.
- 都留重人 (1985) 『現代経済学の群像』(岩波セミナーブックス14) 岩波書店, 1985年6月.
- Worswick, G. D. N. (1977) "Kalecki at Oxford, 1940-44", *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 19-29.
- 八木紀一郎 (1988) 「ケインズ以後のマルクス経済学」『岡山大学経済学会雑誌』19 (3・4), 1988年1月, 239-257頁.
- 山本英司 (2001) 「「根本的な改革」から「決定的な改革」へ——カレツキにおける史的唯物論——」『経済論叢』(京都大学経済学会) 167 (1), 2001年1月, 57-72頁.